

Title	五山版趙注孟子校記
Sub Title	
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1994
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.29 (1994. ) ,p.269- 310
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0269">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0269</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 五山版趙注孟子校記

高橋智

## 目次

- 一、前言
  - 二、現存伝本解説
  - 三、解題
- 五山版趙注孟子校記

## 一、前言

趙岐注の「孟子」が我が国において流布するようになったのは、何時の頃からであろうか。凡そ、現存するテキストに於いて、その軌跡を辿り得る最古の資料と言えるのが、五山版「音注孟子」である。現存古鈔本の成立も、全て本版を溯ることが

ない。それ故に、古鈔本や古活字版に、その字句の異同からして多大な影響を及ぼしていることが想像され、殆んど、本邦趙注孟子の元祖と呼ぶも過言とは言われないであろう。

出版年から言えば、本版よりも早期に係ると思われる四部叢刊（続古逸叢書）所収の、宋刊本に比しても、その欠や誤りを補訂し得ること、一、二ではない。無論、これも、同様の欠誤を全く免れているというわけではない。しかしながら、両版の

異同を概覽する時に、概ね本版に、より妥当を見出し得るような感を抱くこともまた事実である。

本版のもとになった宋本は、建安の坊刻本で、既に佚して残らぬゆえに、その原貌を見ることができない。

従つて、本版が、如何に価値あるテキストであるかを、以上の諸点から、十分に理解することが出来るわけである。

しかしながら、以上の価値もさる事乍ら、本版の内容を他本との比較に於いて、綿密に行なう時に、自づと感得されてくる深い問題点に、えも言われぬ津津たる興趣を感じると知るべきであつて、文献の歴史を説明する意義がここにこそ存在すると確信する程に、これらテキストの成立に関わつた人々の息吹が伝わつて来るのである。

それは、要するに本版の源流たる底本の姿を推測するについて、同系統の古鈔本が多なる示唆を与えることと、古鈔本並びに古活字版の字句の、現行唐本との異同に、有力な根拠を本版が与えるという、いわば、本版と古鈔本・古活字版と相互にその実体を明らかにする作用を及ぼし合つてゐるという、概括すればこのような問題意識と言つてよからう。

古活字版が非常にすぐれたテキストであることは既に前稿

(本論集第二十八輯)に於いて詳述するところであるが、それは実に、五山版の力が与つて余りあるからであり、五山版を中心としたテキストの影響のもと、讀書講習の試行の練成によつて繰り返された古鈔本の過渡期の校勘が、古活字版の成立によつて、一定の成果を定着せしめたという理解が、正鵠を得ていると言えよう。然らば、趙注孟子の文献史の本邦に於ける大きな鍵であり要であるのは、全くこの五山版を置いて他にはあり得ない。

よつて、本校記を参攷にする場合には、四部叢刊本に拠つて、五山版趙注孟子校記を見、次いで古鈔本趙注孟子校記(一)、(二)の順に参見して後に、古活字版趙注孟子校記を参照していただく。以上の順に従つて趙注孟子を読むならば、最善のテキストに接して趙氏の旧に還ることを得て、あまつさえ、本書に醸成された文献の文化史とも呼ぶべき、受容の息吹を感じ取ることが出来るであらう。

本校記は、文献整理の第一次調査を目的とするものであるから、でき得る限り客観的に、異同の全てを網羅して繁を厭うことがなかったが、機を改めて、必須の校記を取捨した校本を定めたいと願つてゐる。いづれにしても、出発点は阮元の孟子校

勘記であるから、彼土の伝本と本邦のそのの校異を大同に結してはじめてひとつの作業を終えることができるのである。

言うまでもなく、校勘に二法あって、「活校」と「死校」それぞれに一家を成した学者が彼土にあったと葉德輝はその定義を定めていう。(蔵書十約・校勘七)

死校者、据此本以校彼本、一行幾字、鈎乙如其書、一点一画、照録而不改。雖有誤字、必存原本。

活校者、以群書所引、改其誤字、補其闕文、又或錯拳他刻、挾善而從、別為叢書、版帰一式。

前者は顧広圻・黄丕烈、後者は盧文弨・孫星衍の出版がその代表者である。

校記を為るに際しても、しかあるべきと信するのであって、誤字や誤刻をも忠実にのこして出版抄写の経過を理解し得るものであり、而る後に善を択んで読書にのぞめばよいわけである。前者を軽んじてはならないし、後者のみを重んじてもまたいけない。両立してはじめて文献の全体像が把握できるのである。誰しもが、全テキストを比較する機会に恵まれるわけではない以上、この作業に当る者が為さねばならぬ重大なそれは責務であると痛感している次第である。

総じて申すならば、五山版外典のテキスト上の源流と意義とを索める研究は、未だ周到に行なわれてはおらない。個々の文献について、その源流を辿れば、本文上に於いて甚だ有益な校異が得られ、五山版全体の傾向が如何なる意義を持つものなのか、その校異に於いて定めることができるのである。

本校記は、こういった前程をも見据えての作業であることも、一言加えておかねばならない。

## 二、現存伝本解説

川瀬一馬博士「五山版の研究」に拠って、以下五点(全て同版)の調査を為し得たが、この機会も所蔵機関諸先生の賜物であって、堂々たる字様の迫力がとりわけ五山版にあっては影印とかけ離れたものであることを認識し得たことを以て、先づは甚大なる謝意の表白とさせていただきたい。

版式は、民国六年(1917)跋刊の羅振玉によるコロタイプ影印本によって知られる如くであるが、左右双辺有界一一行二〇字内外、注小字双行二七字内外。匡郭内一八・〇×一一・九。版心線黒口双黒魚尾、「孟 幾」「丁付」、となっている。本文

上には句点や声点を刻している風に見えるが、書き入れによる点と分別がつかなくなっている箇所が多く、後に影印本はその点を区別なく、字にかからぬものは消去してしまったかの如くである。

宮内庁書陵部蔵 三冊(四〇一/四二)

後補香色表紙、二四・三×一五・八糎。総裏打を施し、原紙は高さが二三・七糎。室町期の朱墨の書き入れを存す。朱筆は、ヲト点・縦点・句点・合点、墨筆は、返り点・送りがな・縦点・附訓・声点・校合・欄外補注があつて全巻を通じて一筆。また、それと同筆と思われる薄墨のものもあつて、これは本文を上からなぞっている。校合には「偕大全」などと「四書大全」を用い、「イ」本もみえる。また、補注には「句解」「集注」「正義」を頻りに援引している。「佐伯侯毛利／高標字培松／蔵書画之印」(第一冊首)「秘閣／圖書／之章」「帝室／圖書／之章」(以上各冊首)の印記がある。

巻一〜四が第一冊、巻五〜一〇が第二冊、巻一一〜一四が第三冊。

「圖書寮典籍解題 漢籍篇」(昭和三五年)に著録がある。

お茶の水図書館成篋堂文庫蔵 三冊(二二六/一/一)

新補茶褐色表紙、二五・七×一五・六糎。第一冊の表紙に「足利時代板／孟子音註 蘇峰秘笈共三／壹」と墨書し、第二冊第三冊は「孟子音註 弐(參) 共三」と墨書する。各冊ともにその内側に墨流し紋様の原表紙を存し、第一冊は中央に「騰」、左上に「趙氏孟子」と、第二冊は右に「騰 三之内」、左に「孟子音注」と、第三冊は右に「騰」とそれぞれ墨書する。本文、注への書き入れは、墨の返り点・送りがな・校合、朱の句点・ヲト点・縦点・附訓・校合があり、また欄外への補注も墨書にて多くある。これらは室町末期頃のものと思像される。第一冊巻一〜五、第二冊巻六〜一〇、第三冊巻一一〜一四。

毎冊(巻一・六・一一)首に「清見寺常住」の印記がある。また同じく毎冊首に「天下之公／宝須愛護」「徳富氏(陰刻)／珍藏記」、毎冊尾には「青山草堂(陰刻)」「蘇／峰」の印記がみえる。第三冊の末尾に、羅振玉の手跋が一葉補綴されている。影印本の末尾に附されているものとは内容を異にする。

孟子趙岐注。正義所載。抛音義所出。刪削六十有九条。皆章指之文。／蓋偽疏刪章指而存注。于注文又多改竄。幸我

邦旧有小宋本・元本・吳文定鈔本・／真定梁氏所藏世綵堂本。得是正譌脫。然諸本今皆亡佚。但存毛・何二家校本。

戴東／原先生拋此板訂。刻之微波榭叢書者是也。予曩在海

東。求此書善本。見足利／本与戴校本一一吻合。惜已不存

宋本面目。今年春始訪／蘇峯見此本。蓋復宋槧本。注後附

音義。音義後附七篇中文句相同者。宋諱缺／筆。洵為趙注

第一佳刻。為季仲子亦未獲見者。誠罕過之秘籍也。予既請

于／蘇峯。為影印以伝藝林。復識語卷尾。以志眼福。丁巳

二月。雪居士羅振玉書／于東山寓居之四時嘉至軒。「羅振

／玉印」(陰刻)「羅／叔言」(陰刻)

更に、別に、綴じられていない一葉にもう一則羅振玉の手跡が

あり、やはり影印本のそれとは少しく内容を異にする。

孟子趙注。偽孫疏多削改。四庫全書提要拋音義詳校／偽

疏本。得音義所出疏本無之者凡六十九條。予嘗拋館／臣所

舉之六十九條。校以阮氏校勘記。皆章指中之文。蓋／偽疏

全削每章後之章指而存注。其於注文亦有改易甚／矣。其妄

也。提要謂。孟子注單行者。世有伝鈔宋本。尚可稽／考得

岐注之旧。嘗疑館臣既知單行注本之善。而顧不著／之。

四庫幸頼孔子微波榭刻戴校本。又深惜戴校所拋／為毛・何

二家手校本。而二家所拋宋元諸本。終不可得見／也。予自

辛丑至辛亥三遊海東。意必有趙注善本。初得見／足利活字

本。与戴校一一相符。分十四卷。仍存邠卿之旧。／欲求更

先于是者。不可得也。今年春始見音注本於德富／蘇峯翁。

乃復宋小字本。注後附音義。後摘七篇中文／句相類者附焉。

雖不知出何人之手。而出於宋代則無疑。／当日毛・何兩家亦

未嘗見者。洵難得之秘籍。因清而影印／之。与戴校本並行。

我邦學者得窺宋槧面目者。蘇峯翁之／惠也。安得異日者。

毛・何兩家所見之宋元諸本。再見於人／間。俾与此本並行。

於藝林豈非快事耶。爰書以俟之。丁未／仲春。雪堂翁羅振

玉書於海東東山宮齊。「臣于／之印」(陰刻)「叔／言」(陰刻)

德富蘇峯の手記に四則あつて次の如し。

足利以前板孟子音註共三「極」  
蘇峰秘笈(帙題簽・「極」は朱印)

孟子音註共三卷全編完備。／竊惟海内無双也。不然。不失

／為無双之一也。經籍訪古誌／所掲。不過于昌平然儲之五

／卷以下剩存本也。蘇峰自記／明治四十一年九月念一夕

(帙上)

音注孟子十四卷旧板覆宋小字本 昌平学蔵／蘇峰所蔵同書全篇

完備矣。／△省略▽……………／右経籍訪古誌抜萃 (新補

表紙見返)

予頃得此帙、竊惟天下一品也。／試尋四庫全書目錄・天一閣書目・愛日精廬目等。遂不得接其書目。但探經籍訪古誌。得別記書目及解題焉。今与／此对照遂一如合符節。予以此知此帙／之為宋板覆刻也。而未知昌平学然孟子音／注于何定耶。明治四十一年九月十四日夕／蘇峰学人（同前）  
稲田福堂曰。藏弃此書。未与吾書異合及優劣奈何也。／大正丙辰八月 氏／於成箕堂文庫／蘇峯手加／今也稲田逝矣。其藏書／運命竟奈何。何日得对照乎。（補綴された羅跋の葉の裏）  
△以上全て句点は校者▽

「新修成箕堂文庫善本書目」（平成四年）に著録がある。

東洋文庫蔵 四冊（II・Ba・2）

後補濃縹色絹表紙、二七・五×一六・九糎。全葉に襖紙を加える。原紙は高さ二四・三糎。全巻本文のみに朱の返り点・縦点・送りがな・傍線、墨の附訓が施され、室町期の筆と推測される。それと同筆にて欄外に墨筆があり、やや、足利学校関係写本の書き入れの字体に似ている。虫損や破損の部分は比較的新らしい時代に補写されている。

第一冊が卷一〜三、第二冊が卷四〜七、第三冊が卷八〜一一、第四冊が卷一二〜一四。

蔵書印は「江風山／月荘」「稲田／福堂／図書」が共に、序首・卷三首・卷六首・卷九首・卷一二首に、「福堂」印が卷二末・卷五末・卷八末・卷一一末・卷一四末に捺される。「雲邨文庫」印は、卷二末・卷三末・卷五末・卷七末・卷一一末・卷一四末にある。稲田福堂蔵する時、五冊本であったと思われる。印面が実に美しい一本である。

「岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅰ」（平成二年）に著録がある。

大東急記念文庫蔵 二冊

卷一一から卷一四（卷末の二丁を欠す）までの零本。後補茶色表紙、二三・六×一六糎。包背装。第一冊の表紙に「万章上下／告子上下／孟子注九之十二」（「九之」二字抹消）と、第二冊に「告子上／尽心上下／孟子注十二之十四」とそれぞれ墨書する。総裏打を施し、襖紙を用いる。書き入れは、失筆の返り点・送りがな・縦点・附訓。江戸中期頃のもののか。

第一冊は卷一一、第二冊は卷一二〜一四。

印記は、「昌平坂／学問所」（各冊表紙・卷一一末・卷一四

末、「文化壬申」(巻二一末・巻二四末)、「福堂」(巻二一末・巻二四末)、「江風山/月荘」(巻二二首)、「浅草文庫」(巻二二首)。

「大東急記念文庫 貴重書解題第一巻」(昭和三年)に著録がある。

武田科学振興財団杏雨書屋蔵 三冊(恭仁)

後補薄茶色表紙、二三×一六糎。総裏打。第二冊表紙に「滕文下/離婁下/孟子注<sup>六之八巻一至</sup>」<sub>巻五欠</sub>と墨書する。遊紙一丁あり、「列女伝」「韓詩外伝」「原道篇」「万花」(錦繡万花谷)から、孟子に関連する記事を抜抄したメモを墨書し、朱句点・朱引を加う。室町時代末期頃の筆と思われる。本文中の書き入れには、墨筆の返り点・送りがな・縦点・附訓・校合が、題辞から巻一の一の一部分に至るまで加えられ、室町時代末期頃と推定される。巻一一の一部以降は全く墨筆の書き入れがない。また、朱句点・朱引が題辞から巻二の首までと巻三の一部、巻六から巻一〇までに同筆にて存している。更に、欄外に巻六から巻八まで墨筆があり、本文中のそれとは別筆にして近世初期に下るものと想像する。

第一冊は巻一から四。第二冊は巻五から一〇。第三冊は巻一

一から一四。

巻五は、東洋文庫蔵本を用い、「染紙に玻璃版に印刷して補ったと聞く」(長沢規矩也著作集第七巻三〇四頁)。

巻四の末に墨識語あり。

文政九歳次<sup>丙戌</sup> 穰八月六日宗荐自/相伝了/弟子衆/得業

宗賀<sup>戒八</sup>  
生十七

巻一四にも同文の識語(穰を孟秋に作る)がある。

印記は、「昌平坂/学問所」(第二冊表紙・巻八末)、「浅草文庫」(巻六首・巻九首)、「文化壬申」(巻八末)、「江風山/月

荘」(巻六首・巻九首)、「福堂」(巻五末△影印▽・巻八末)。

「炳卿審/定善本」、「炳卿珍藏旧/槧古鈔之記」(共に各冊首)。

他に亀型印が各冊首に。

他に亀型印が各冊首に。

「恭仁山荘善本書影」(昭和一〇年)、「新修恭仁山荘善本書

影」(昭和六〇年)に収載される。

以上五箇所到现在所蔵される伝本の流传を整理すると次の如くである。

なお、昌平校旧蔵本の、欠する巻一一五は、杏雨本の巻一一

四の朱の書き入れが、その巻六一一〇の朱の書き入れと同筆の

如く思われるところから、まさしくこれに相当するものであるかも知れない。さすれば、完本が三部、欠巻五が一部、存巻一—一四が一部、という計五部の同版本が現存しているといえる。

一、毛利家——書陵部

一、清見寺——徳富氏成簀堂文庫——お茶の水図書館

一、稲田福堂——和田雲邨——東洋文庫

一、昌平校（経籍訪古志著録本・巻一—五欠）

（巻六—一〇）——稲田福堂——内藤湖南——杏雨書屋

（巻一一—一四）——稲田福堂——古梓堂久原房之助

——大東急記念文庫

一、？——内藤湖南——杏雨書屋

（巻一一—一四）

### 三、解題

羅振玉が「吉石齋叢書二集」に「音注孟子」を影印した際に、自らの跋文をも附印して次のように述べている。

△孟子趙注▽偽孫疏は多く改削す。△四庫全書提要▽は

△音義▽に据りて以て偽疏本を校するに、凡そ△音義▽出づる所にして疏本にこれ無き者六十九条を得。予嘗て館臣の挙ぐる所の六十九条に就きて校するに△阮氏校勘記▽を以てするに、皆△章指▽の文たるを知る。蓋し、偽疏は全て毎章後の章指を削りて、而して注を注文に存し、又、任意に省き改むること甚だし。其れ妄なり。△提要▽謂ふ。孟子注の単行する者、世に伝鈔宋本あらば、尚稽考して岐注の旧を得べし、と。嘗て館臣既に単行注本の善を知りて、かえってこれを著さず。△四庫▽幸いに孔子微波樹刻戴校本に頼る。又、深く惜しむ、戴氏据る所は毛・何二家の手校たりて、彼の二家見る所の宋元諸本は終に見るを得べからざるを。予、辛丑より辛亥に至るまで三たび扶桑に遊ぶ。意は必ず趙注の善本にあり。初め足利活字本を見るを得、戴校と頗る合す。其の分巻十有四は仍ち是れ邪卿の旧なり。更にはより先なる者を求めんと欲するも得べからず。今年春、始めて音注本を徳富蘇峯翁に見る。乃ち復宋小字本にして注の後に音義を附す。音義の後に七篇中文句の類似する者を摘みてこれを附す。何人に出づるかを知らずと雖も、出自の宋代たるは疑いなし。我国毛・何の諸家

もまた未だ見るを獲ざる者にして、因りて請いて影印し、以て戴校と並び行ないて以て宋本の真面を存す。ただ、中に半紙を佚す。嗣いで吾友内藤博士もまた一本を蔵するを知る。因りて両本の写影を合して尤も明晰なる者を択びて印に付す。月を逾えて苦成す。爰に語を後に綴して以て蘇峯翁及び湖南博士の嘉惠をしるす。時に宣統丁巳閏月晦、雪堂居士羅振玉海東東山の寓齋に書す。

趙注孟子単行本の中国に於ける流伝の様子は、杉山一也氏「趙岐撰『孟子章指』の輯佚」（中国研究集刊・大阪大学文学部中国哲学研究室・一九八八年六月）が簡明で、また拙稿「韓本孟子趙注について」（汲古第一二二号・汲古書院・昭和六二年）をも参照していただきたい。我が国に於けるそれについては、拙稿「旧鈔本趙注孟子校記」（本論集第二四輯・第二六輯）、「古活字版趙注孟子校記」（同第二八輯）に整理し終えている。ゆえに、かの「阮氏校勘記」にこれらを加えて考ずれば、「岐注の旧を得る」ことは、もはや困難なことではないと言い得よう。さて、宣統丁巳、すなわち民国六年（一九一七）にこの音注孟子を目にした羅振玉の驚きは大きいものであったと想像されるのであるが、我が国に伝来した旧鈔本、そこから続いた古

活字版を詳校した校者は、実は既に、この流れの中に、音注孟子の姿が溶け伝わって吸収されている様相を認識して、かの驚きをいま共有することはできない。

「足利活字本」というのが、古活字版のことである。足利学校遺蹟図書館には古活字版の孟子は所蔵されないが、「七経孟子考文」に「足利本者亦本学所印行活字板也」とあることから、このように呼ばれるようになった。<sup>(1)</sup>この活字本の中に音注孟子に備わる面影が色濃く含まれていることは、校記を参照すれば瞭然としよう。更に、音注孟子と題する古鈔本が存在（竜谷大学とお茶の水図書館）し、元良本（東洋文庫蔵）の書き入れに音注本の名がみえ、また、清家本の校合に「音作……」「音積作……」などとみえるのが、或いは音注孟子かそれに類する同系本の宋版乃至その覆刻本を想像せしめる要素たりうることからして、むしろ音注孟子の存在は、我が国にあっては、驚くべきことであるよりも、必然のことであったと言える。驚くべきと言えば、宋版音注孟子が、中国に於いて全く伝を失ったにもかかわらず、日本の中世期の旺盛な出版活動の力で、その原形を留め残したという、わが受容力の意義の大きさに対して抱くべきと感じるのである。

この所謂五山版の音注孟子の刊刻は、南北朝（一三三六—一三九二）時代とするのが定説で、それ以上の具体的な年次を定める資料はない。島田翰が「古文旧書考」に貞和元年（一三四五）以前の刻本と断じたのは遽には信じ難い。拙稿「抱残守闕 責在後人—島田翰の奇書」（汲古第二〇号・汲古書院・平成三年）を参照。

もつとも、五山版の刊刻とその底本との関係についての、綿密なる研究は、今後の大きな課題であって、既に、椎名宏雄氏によって禅籍の宋元版と五山版の関係を追究する研究が行われているものの（「宋元版禅籍の研究」・大東出版社・一九九三年・等を参照）、外典についてのそれは未だ緒についているとも言いがたい。一般に、五山版は宋元版の覆刻であるという通念が、五山版を見る者の頭に染み込んでしまいがちであるが、椎名氏の研究によるならば、その両者の関係はそれ程単純なものではないことが知れる。要は、その両者を左右にして比較校対すれば、如何なる関係かを定め得るのであるが、それは、両者の現存と閲覧の便という二つの条件が相俟ってはじめて可能となるわけで、それには多大な困難が伴うことはいうまでもない。まして、底本と推測される宋版が現存しない音注孟子にあつ

ては、本版が覆刻であるのか翻刻であるのか、さて字句に改めた所があるのかどうか、などの問いに答えるすべは全くない。従って、本版を覆宋本とするのは厳密には推測の域をけして出づるものではないという認識も必要であると思われる。

底本が宋版であるのか元版であるのかに焦点があるのではなくして、覆刻というところに意識を向ける必要があるというのである。

このことについて、少しく考えてみよう。

現存古鈔趙注孟子のなかに、音注、乃至はそれに類する附注を有するものを、再びここに列挙してみる。

- 一、広隆寺本（斯道文庫蔵） 題辭と卷一の首に音注を附す。
- 一、養安院本（台北故宫博物院蔵） 卷三・卷四に音注、卷四に「重言」「重意」「互註」を附す。
- 一、竜谷本（竜谷大学図書館蔵） 音注孟子と題し、音注その他を附す。
- 一、成簣堂本（お茶の水図書館蔵） 音注孟子と題し音注並びに「重言」を附す。
- 一、東急本（大東急記念文庫蔵） 纂図互註孟子と題し、音注・「重言」・「重意」・「互註」を附す。

一、三条本（慶応義塾図書館蔵） 各巻末に音義を附す。

以上の伝本が現存する。音注というのは概して宋孫奭の孟子音義に拠るものであるが、五山版にしる、これら鈔本にしる、孫氏音義の全部を附入しているわけではなく、省略する箇所が多いのであるが、その省略のしかたもまちまちであって一様ではない。重言・重意・互註というのも東急本、養安院本が共に一致するわけではなく、五山版に附刻された「文句類似者」〔重言〕も、内容から言えば重言重意に同様のものであるが、それら鈔本に加えられたものとは同じでない。但、竜谷本は、五山版と音義その他を殆んど同じくし、若干の字句の異同を除けば、両者は同一のテキストであると断ずることができよう。<sup>(2)</sup>この竜谷本が行格を五山版と異にするのに対して、成篁堂本は行字数をも五山版に等しくしている同一のテキストである。<sup>(3)</sup>従って、これら音注孟子と題した<sup>(4)</sup>二本は、五山版とは親子・兄弟いずれの関係であるにせよ、同一群と見做して整理し得よう。しかしながら、この二本以外の鈔本の存在を吟味する時に、五山版音注孟子は宋版を覆刻したものであると、きっぱり断定してしまふことに些少の不安が遺らないでもないのである。いったい、鈔本を作る時に古人は如何なる習慣と思慮をもつ

てなしたのであろうか。敷き写しもしたであらう、読みやすくと簡略にして注を省いたり行字数を変えたりもしよう、様々な事態が推測されるのであるが、古鈔本は、あくまでも近世の儒者が為した如き、会注・自注を目的とする、いわば著作としての意識をもって為されたという状況は極めて希薄であると考えべきであって、校合にしる補説にしる、必らずやそれらは、本文や注の原貌を失わないという前提のもとに、いやその原貌を索める為に為される営為であったと理解されるのである。それゆえ、音注にしる重言重意にしる、それは、拠るところがあつて、鈔本中に加えられるのであつて、鈔者や校者自ら加えるという、意味のないものではけしてない。ならば、広隆寺本にしても養安院本にしても音義その他が部分的にしか加えられていない様子や、東急本の互註が全体で一〇箇条余りとやや少なく、重言重意を含む宋版系のテキストがそう幾つも存在したとも考えられぬが、東急本・養安院本のそれは同一ではないなど、やはりこれらの附録を鈔写する際に、鈔写者の取捨選択があつたものとする想像も充分になりたつのであつて、据るところにあつて尚且取捨されたところから、こうした種々の形のテキストが生まれたのだと、把握するべきであらうと考える。

それゆえに、拠るところがあるという意識は、鈔本を為す者も、五山版を刊刻せる者もそれは同列の筈であって、共通の出発点を持っていたことであろうが、その先の取捨選択というその思慮は、果して同列なのであるのか否か、それが不明なのである。同列でないという慣習が認められれば、覆刻と断ずるもまた可とすべきであろうが、同列であろうとする推測を否定すべき根拠も、今は無いのが実状である。

この事は、五山版の出版に関わる、テキスト上の最も大切な問題点であり、特に外典にあって、その正確なテキスト上の位置付けがなされるに当って、ないがしろにすることのできぬ要点なのである。

極端な推論を試みよう。凡そ、経書に於いて、纂図互注重言重意の名を冠する宋版は、比較的容易に目にすることができる。阿部隆一博士の「宋元版所在目録」（同遺稿集第一巻・汲古書院）に拠って見れば、易・書・詩・礼・春秋の各経に幾種かの伝本がある事が知れる。見れば、書名は違っても、重言重意や互註の内容は皆同じである。これは、宋代に、何人かが同じ文句が見える箇所を注して、一種の索引代わりの便を計った

編纂が、各伝本にそのまま受けつがれていったものである。音注孟子の音義の後に附されたものも、亦、重言とは題してないが、内容から重言と題して良い性質のものであり、東急本に題する重言の内容と全く同じものが大部分である。

しかしながら、東急本にみえる重意と互註については、五山版のなかにはみられないものであって、同時に、養安院本に附される重言は五山版と意味が同一であっても記載の方法が違っているのである。例えば、後者についてみると次の如くである。卷四、「孟子將朝王」章の重言である。

五山版（告下）言將行其言也則就之迎之致敬以有禮則就之養安院本（重言）則就之二告兩見

要するに、「則就之」という表現が告子篇に二箇所見えることを言っているわけであるが、その表現方法が異っている。更に又、養安院本にみえる重意・互註は、五山版にも東急本にもみえないものである。

すなわち、東急本・養安院本・五山版の三種の伝本に附された重言・重意・互註には、それぞれ出入有無があり一定していないという事実があつて、それは見逃すことのできない問題をはらんでいるようである。

従って、この事実からいったい何を推測することができるのかを考えてみる。

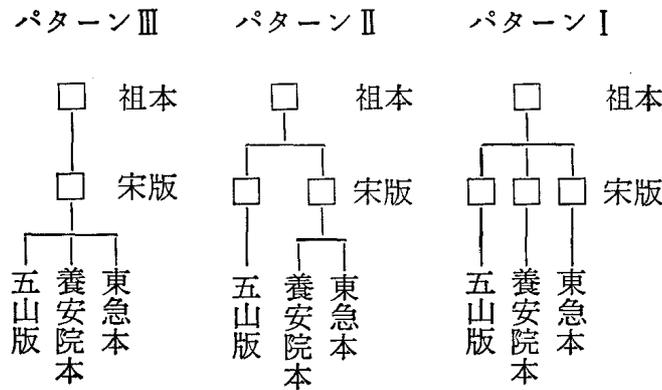
先づ考えられるのは、それぞれがもとにした底本たる宋版がそれぞれ異本であつて、その宋版は取捨選択された重言・重意・互註が附されたものであつたといふこと、つまり、東急本・養安院本・五山版の三種のそれぞれのテキストは、底本にかなり忠実に添ったもので、すなわち、重言重意系の宋版が幾つか、孟子趙注について存在したといふ推測である。この推測は、校者が、旧鈔本・古活字版校記に於いて、一貫して主張してきたものである。

次に考えられるのは、宋版に、重言重意互注を附するものと、重言のみを附するものと、の所謂纂図互注本と重言本の二種類を存し、東急本と養安院本は前者の重言重意互注を取捨選択して、五山版は後者の重言本にそのまま依つて、それぞれ成立したと考ふる推測である。

もう一つ考えられるのは、やはり重言重意系の宋版がそういうくつも存在したとは考えず、東急本の内題にみえるが如く、「纂図互註孟子」か、又はそれに類した内題を有する宋版があつて、それを中心に、重言・重意・互註を取捨選択、編纂して東急本

・養安院本・五山版の三種の伝本が現存するという推測、すなわち、五山版にも重意や互註がない以上、必らずしも忠実なる覆刻によって成立したものと限らないといふことを想像せしめる推測である。

以上の推測を、順を追つて図式化して整理すると次のようになる。



本文乃至注文の異同を鑑みるときは、パターンⅠ又はⅡに感ぜられるが、附刻される重言重意互注の出入をあわせるときには、パターンⅢの可能性とて否定はできない。

要は、五山版についての考察に於いて、その祖本たる宋版に、音注孟子なるものが存在したのかどうか、という問いに帰するのであるが、残念ながら、正確に答える術は全くない。

しかしながら、何れにしても、以上の推測は、そもそも古鈔本がいか様にして成立するのか、また五山版の由来とはいかなるものであるのか、こういった謎に包まれた複雑な事実関係を解き明かす、不明瞭ながら、そのヒントがおぼろげに浮かんでくるような推測であると言えるのではあるまいか。それ故に敢えてここに推論を試みたのである。

さて、これまでの推論は、重言・重意・互注に就いてのものであるが、もうひとつ重要な、「音義」についても言及しておく必要がある。「音義」とは即ち宋孫奭（九六二—一〇三三）撰の「孟子音義」である。この孫奭音義については別に稿を改めるつもりであるが、そもそも、もと単行で行なわれたものが、本文に附刻されるようになってから種々の問題が生じる結果となったゆえに、附刻の状況を詳らかにしておくことも、五山版

音注孟子の成立を考察するうえに於いて、意義あることと思われるのである。

やはり吉石齋叢書に影印される黄丕烈刊行の覆宋単行本の「孟子音義二卷」をもとにして、音注孟子に附刻された音義を対校すると次のような様相を見てとることができよう。

- 一、全体を通じて凡そ一二〇五項目の音義のうち、附刻されるのが凡そ八〇〇項目、載せないものが四〇五項目。
- 二、各項目の音義の文章を略省している箇所がかなりある。
- 三、省略する際に誤れるもの二条あり。
- 四、覆宋単行本に載せぬ音義で、五山版に載せるものが十五条存する。無論、もと孫奭の撰に係るものなのか否かは不明。
- 五、五山版中の明らかな誤刻もある。蓋し六条。
- 六、五山版音注の中には、「朱曰」として朱熹の音注を刻すること六条。

以上六つの条項に分類してみると、その特徴が概略把握できるであろう。

各項目の具体的な実例を列举すれば、三についてその二条とは、万章章句下「獵較」の較字への音義、覆宋本は「丁張竝音角」に作る。丁は丁公著、張は張鑑、共に孫奭以前の音義の作

者。五山版は「竝音角」に作る。従って、丁・張二字を略するならば、竝の一字は衍字である。もう一条は、前後するが、孟子題辞中「墨翟」の翟字への音義である。覆宋本は「音狄後墨翟皆放此」に作るのに対し五山版は「音狄後」に作る。後字は墨翟二字に続いて意味を成すもので、略するならば後字も削去すべきである。

四についてその十五条を挙げれば以下の如くである。

- (1) 畜易六反 梁惠王上「梁惠王曰寡人之於国也」章本文「雞豚狗彘之畜無失其時」の「畜」字について。
- (2) 去上声 梁惠王下「孟子見齊宣王曰所謂故国者」章本文「然後去之」の「去」字。
- (3) 斲音卓 梁惠王下「孟子謂齊宣王曰為巨室則」章本文「匠人斲而小之則」の「斲」字。
- (4) 惡音烏 公孫丑上「公孫丑問曰夫子加齊之卿相」章本文「曰惡是何言也」の「惡」字。
- (5) 濡音儒 公孫丑下「孟子去齊尹士語人曰」章本文「是何濡滯也」の「濡」字。
- (6) 勝去声 離婁上首章本文「不可勝用也」の「勝」字。
- (7) 覆音富 離婁上首章本文「覆天下矣」の「覆」字。

(8) 瀆音實 離婁上「孟子曰伯夷辟紂」章本文「居北海之瀆」の「瀆」字。

(9) 属音燭 離婁下「公都子曰匡章通国」章本文「夫妻子母之属」の「属」字。

(10) 屏必井反 同右「出妻屏子」の「屏」字。

(11) 豢音煥 告子上「孟子曰富歲子弟」章本文「猶芻豢之悅我口」の「豢」字。

(12) 佚音逸 尽心上「孟子曰以迭道使民」章本文「佚道」の「佚」字。

(13) 勝音舛 尽心上「孟子曰易其田疇」章本文「不可勝用也」の「勝」字。

(14) 辟音譬 尽心上「孟子曰有為者」章本文「辟若掘井」の「辟」字。

(15) 勝平声下同 尽心下「孟子曰人皆有所不忍」章本文「仁不可勝用也」の「勝」字。

以上の項目を、参攷までに、朱熹の注に照らし合わせてみると、(2)・(10)・(15)については朱注も同じ、(1)は「畜許六反」、(4)は「惡平声」、(6)は「勝平声」、(13)は「勝音舛」、(14)は「辟読作譬」、にそれぞれ作り、その他は朱注にもないものである。

これに関連して第六条の、「朱曰」として挙げる音注を列挙してみよう。

。朱曰為去声 梁惠王上「齊宣王問曰齊桓晉文」章本文「為不用力」「為不用明」「為不用思」の「為」字について。現行朱注には「為不之為去声」に作る。

。朱曰養去声 滕文公上「滕文公問為國」章本文「同養公田」の「養」字について。

。(「朱」と陰刻) 為易各去声下同 滕文公上「有為神農之言」章本文「為天下」「與人易」の「為」「易」字について。

。朱曰為去声 滕文公下「周霄問曰古之君子仕乎」章本文「願為之有室」「願為之有家」の「為」字について。

。為朱曰去声 滕文公下「万章問曰宋小國」章本文「為其殺是童子」の「為」字について。

。朱曰惡去声 離婁上「孟子曰仁之實事親」章本文「惡可已也惡可已則」の「惡」二字について。現行の朱注には「惡平声」に作る。

これを以ってみれば、本版の編纂者は、古注に拘泥してないことがよくわかる。他に、公孫丑章句下の篇題下に「此篇自第二章以下說孟子出處行實為詳」と朱注を刻し、滕文公章句上、

「放勳曰勞之來之」の「曰」字に、「朱本又作曰」と朱説を參攷に附している二箇所にも、朱注、また朱注本を重んじている姿勢を見て取ることができる。かくして、音注孟子というテキストの成立に、朱熹集注本が大きく関与していたという事実は、注目に値しよう。

第五条の誤刻については次の通り。

。為王于偽切 梁惠王下篇 五山版于誤丁。

。勾踐古侯切 同 五山版勾誤句。

。当直音值 離婁下篇 五山版下誤不。

。如底詩作砥同 万章下篇 五山版底誤底。

。任人張音 告子下篇 五山版壬誤七。

。揣初委切 同 五山版揣誤翅。

最後に第二の項目については改めて特筆する程のものではないが、例えば次のように略している場合がある。

梁惠王下「齊宣王問曰交鄰國有道乎」章の「樂天」の「樂」字の音注、「音洛此卷内惟下文相說之樂及注樂師樂章樂詩樂正皆音岳余竝皆音洛」を五山版は、「樂音洛下文除相悅之樂外皆同」に作っている。本文「相說之樂」とその注の「樂」字は音が岳であるというのを、「相悅之樂」以外の「樂」字は皆音が

洛であると言うのである。意を取って省略している例である。

以上、六つの項目について、その実例を列挙したが、要するに、音注孟子の編者が如何なる規準によって、音義の附載を選択したのかという意識にまで思い及べば、本書の成立背景を理解する一助になるうと思われるのであって、その為の材料として挙げ得べき実例とは、かくの如きものであると考えられるわけである。

最後に形態上特記されるべき事実について、一二言及する。

ひとつは、既に前掲拙稿「抱残守闕 責在後人―島田翰の奇書」のなかに触れたことであるが、卷第八離婁章句下、「孟子曰王者之迹熄」章から「孟子曰天下言性也」章にいたる六章について、その章指を欠しているということである。それによって卷八の第六葉の字詰が、本文十六字、注文が二十四字前後と、他葉よりも少なく、間があいてしまっている。

結局この事実の意味するところもやはり、底本との関係というところに行きつくのであるが、つまり、章指の欠落は他本で容易に補うことができるが、問題は、五山版の底本が同じ様に欠落していたのか、そしてその欠落も破損等の形態上の理由によるのか、またはもともと欠していたのか、ということを考える

必要があるわけである。

このことについて島田翰は、「古文旧書考」のなかで、そもそも同じ様に欠落していたという元刊本、養徳齋本というものを挙げて、五山本のもつく由来を明らかにしているが、この養徳齋本の存在というのは、拙稿にも述べた如く、信じ難いものであって、この字詰の不自然さから推測されるのは、たとえ底本となったものの欠落が同じであったとしても、それは破損や欠葉等の原因から生じる結果とみるのが妥当と思われる、底本に、本来欠落のあるテキストを想定するのは妥当ではないと考えられる。尚、本葉を五山版成立後の補刻であるとする説もあるが、とらない。

いずれにせよ、五山版音注孟子が、つまるところ覆刻という成立状況のみに依拠するものではないかも知れない、という推測に可能性を与える事実であるとも、また言い得よう。

次に欠筆について一言を付す。本版の欠筆は、玄敬殷恒貞徹讓桓完慎の字に及ぶ。従って、若し本版が底本たる宋版に忠実であったとするならば、その宋版は南宋孝宗朝を上限とする出版期と推定し得る。

しかしながら、この欠筆の問題は宋版と五山版の覆刻翻刻の

関係とも相俟って、厳格に踏襲するものであるのか否かについての幅広い調査が為されなければ、意味のある推定とは言い難い。

尚、校記作成をも含めての作業は全て影印本に就いて為したものであるが、影印に際しては、先に述べた如く、句点や声点の後人の書き入れとともに消去された可能性があるということの他は、原本に手を加える行為が本文内容に及んでいるような事実はなく、本書の全体像を把握するうえに於いて、影印本による調査は、いささかも支障をきたすものではないことも申し添えて、以上、本版を形態的に特徴づける重要な事項の報告を以て、本書の解題とする。

注(1) この事に就いて、本文庫蔵浜野文庫本並びに東京都立中央図書館蔵諸橋文庫本の「七経孟子考文並補遺」(清嘉慶二年序刊本)に移写された狩谷掖斎の説には次の如くい

友人吉漢官曰。活字／板諸経皆古時京洛／所為。非足利学刊行。／望之嘗游足利学。目／觀所蔵活字版子。取／

而撮数字帰家。按之／活字本諸経。字様迥／別於是。信漢官之言／不妄。山井氏曰足利／本者誤。(句点校者)すなわち、吉田篁墾が言うように、古活字版とは足利学校の刊刻にはあらずして、京の刊刻に係るものという。「考文」が行なわれて以来、この誤称は今も続いていると言っても過言ではない。

注(2) 竜谷本の、卷八の尾題のみが他巻と異なり「古注孟子卷之八」と題しているのは、五山版と全く同じである。ただし、字句に於いては全く同一というわけではなく、例えば、次のような明らかな違いがみえる。

公孫丑下「孟子去齊至士誠小人也」章  
濡滞猶稽也 竜谷本猶稽作淹久・五山版猶作孰。  
万章上首章

三十在位 五山版同・竜谷本三作五。

これらは要するに、竜谷本が写する時に異本に拠って校訂を加えた証とみるべきであって、竜谷本が五山版に基づいている事実は動かさず、ここにも古鈔本が如何にして成立するのかの状況を窺知できるのである。

注(3) 告子上「孟子曰無或至非然也」章

曰奔秋 五山版秋作利・成簣堂本秋作利。<sup>秋イ</sup>

告子下「公孫丑問曰至五十而慕」章

詩邶風 五山版邶作耶・成簣堂本邶作耶。<sup>邶イ</sup>

のように成簣堂本は全く五山版の敷き写しに近い写本であるが、他本を以て校合しているところに大いなる価値がある。

注(4) 他に、大和本(大和文華館蔵)は、本文のみにして注を省くが、卷一〇・一一の尾題が「音注孟子」に作ることに、  
滕文公上終章

徐子以告孟子曰 大和本五山版共重孟子二字。

等の如く字句も同一の異同を示すことから、やはり五山版に依拠したものであらうと推察される。

注(5) 例えば、足利学校遺跡図書館蔵の宋刊巾箱本周礼一二

卷は、静嘉堂文庫蔵の宋刊纂図互註周礼一二巻と比するに、纂図互註本の重言のみを附して、重意・互註は省略して附さない。このような例をもってみれば、重言重意系の宋版に重言重意が取捨選択された幾種かの伝本が存在する可能性を、趙注孟子に於いても否定はできない。

## 五山版趙注孟子校記

### 凡 例

一、本校記は、「宋孝宗朝・蜀」刊の「趙注孟子」(四部叢刊影印)を底本とし、五山版「趙注孟子」の、経文と趙注の文字の校異を示すものである。

一、底本の経文注文の各句を摘録標出(注文は経文より二格を低す)し、一格を空けて校異を記す。

一、字体は、原則として通行の活字体を用いた。異体字・略字・俗字、また木偏と手偏草冠と竹冠の混用などは原則として記さない。

### 五山版趙注孟子校記

孟子題辭 趙氏

五山版作趙氏孟子題辭

争彊 五山版彊作強。

墮廢 五山版墮作隳。

開延 五山版延作筵。

孟子卷第一 趙氏注

五山版卷首如左

音注孟子卷之一 以下內題皆倣此

梁惠王章句上 凡七章

梁惠王者魏惠王也魏國名惠諡也王号也時天下有七王皆僭号者也猶春秋之時吳楚之君稱王也魏惠王居於大

後漢太常趙 岐邠卿 注

孟子見梁惠王孟子適梁魏惠王 禮請孟子見之 王曰叟不遠千里而

○梁惠王章句上

○孟子見梁惠王至何必曰利

與利除害也 五山版也作者乎。

疆兵 五山版疆作強。

因為王陳之 五山版之下有也字。

△章指▽集穆 五山版集作輯。

○孟子見梁惠王至豈能独樂哉

古賢之君 五山版作古之賢君。

台池禽獸 五山版禽作鳥。

○梁惠王曰至天下之民至焉

足以笑百步止者不 五山版足作是。

直事不百步耳 五山版事作爭。

以為宅冬入保城 五山版冬作各。

不可以僭役 五山版僭作徭。

頌者斑也 五山版斑作白。

頭半白斑斑者也 五山版作頭半白曰頌斑者負也。

故斑白者不負戴也 五山版作故曰班白者不負戴於道路也。

率土之民 五山版土作王。

以用振救之也 五山版振作賑。

○梁惠王曰至民飢而死也

王曰杖刃殺人 五山版杖作挺。

孟子欲以喻王 五山版次作政。

王復曰政殺人無以異也 五山版曰下有刃字。

為率禽獸以食人也 五山版人下有者字。

虎狼食禽獸 五山版此五字作古者虎狼之中能常食於禽獸是

人所惡今十七字。

父母之道也 五山版也下有已字。

○梁惠王曰至請勿疑

故曰仁者無敵 五山版無故字。

暴虐已 五山版已作以。

△章指√仁与不仁也 五山版仁下有者字。

○孟子見梁襄王至誰能禦之

△章指√一道而已 五山版一道作仁政。

○齊宣王問曰至未之有也

然後道齊也 五山版齊下有之事二字。

心賤薄之 五山版心作必。

時未見羊 五山版時上有王字。

以嗟歎 五山版歎作嘆。

秋豪之末 五山版豪作毫。

挾大山 五山版大作太。以下此章倣此。

八妾從以乃兄弟 五山版八作入。

敵疆 五山版疆作強。

王道之本 五山版本下有耳字。

我情思悞乱 五山版情思作悞恩。

△章指√欲踐其路 五山版路作跡。

孟子卷第一 五山版作音注孟子卷之一。

孟子卷第二 趙氏注

梁惠王章句下 五山版無趙氏注三字、梁惠王章句下下低六格有

凡十六章四字。

○莊暴見孟子至同樂則王矣

○齊宣王問曰至不亦宜乎

西伯王地 五山版王作土。

○齊宣王問曰至王之不好勇也

文王事混夷 五山版混作昆。

詩云混夷 五山版混作昆。

大王去邠 五山版大作文。

安其大平之道也 五山版大作太。

篤周祜 五山版祜作祐。

○齊宣王見至畜君者好君也

助其力不足也 五山版足作給。

人君興師行軍 五山版軍作事。

放棄不用先生之命 五山版生作王。

大師樂師也 五山版大作太。

○齊宣王問曰至於王何者

仕者世祿賢者子孫 五山版者作老。

言居今之世可矣 五山版言上有詩人二字。

於其与姜女 五山版其作是。

○孟子謂齊宣王至王顧左右而言他

當如之何 五山版何作可。

孟子以此動王心 五山版王作正。

○孟子見齊宣王至可以為民父母

人所謂是旧國也者 五山版者作眷。

常能輔其君 五山版常作當。

尊卑親疎 五山版疎作疏。

寔繁有徒 五山版寔作實。

○齊宣王問曰至未聞弑君也

○孟子謂齊宣王曰至彫琢玉哉

△章指▽玉不成圭 五山版圭作器。

○齊人伐燕勝之至亦運而已矣

書曰歲三百 五山版歲作暮。

△章指▽民心悅則天意得 五山版天作大。

○齊人伐燕取至可及止也

皆尚書逸篇之文也 五山版無之字。

夷服之國也 五山版服作狄。

天下諸侯素畏齊疆 五山版疆作強。

△章指▽以小王大 五山版以大王小。

○鄒與魯闕至其長矣

○滕文公問曰至是可為也

○滕文公問曰至強為善而已

吾甚恐如之何則可 五山版甚恐作恐甚。

自強為善法 五山版無法字。

○滕文公問曰至挾於斯二者

以珠玉不得免焉 五山版玉作王。

繒帛之貨也 五山版無也字。

先人之之所受也 五山版不重之字。

○魯平公將出至使予不遇哉

臧倉小子 五山版子作人。

孟子卷第二 五山版作音注孟子卷之二。

孟子卷第三 趙氏注

公孫丑章句上 五山版無趙氏注三字、公孫丑章句上下低六格有

凡九章三字。

○公孫丑章句上

丑有政事之才 五山版才作木。

○公孫丑問曰至惟此時為然

得当仕路於齊 五山版仕作付。

晏嬰之功 五山版晏作安。

謂大甲大戊 五山版大二字共作太。

王莫之能禦也 五山版無之字。

今齊地土民人已足矣 五山版已作以。

△章指▽管晏雖勤 五山版晏作嬰。

○公孫丑問曰至有盛於孔子也

目不轉精逃避 五山版精作睛。

不当輕驚懼之也 五山版無驚字。

志氣之相動也 五山版無也字。

洽於神明 五山版洽作合。

芒芒罷倦之貌 五山版罷上有然字。

若實孟言雄雞 五山版孟下有子字。

与申生政能知 五山版生下有之字。

丑見孟子但言 五山版丑作曰。

謂孟子欲自比孔子 五山版比作此。

可願比伯夷不 五山版不作否。

非其君不事 五山版此句上有曰不同道言伯夷之行不与孔子伊尹同道也十八字。

其得行道而已矣 五山版其作冀。

亦不王於其所好 五山版於作阿。

為丑陳三子之道孔子也 五山版丑作曰。

如使当堯舜之処賢之遠矣 五山版処作世。賢上有覲於制度

四字。

等百世之王莫之能違也 五山版違作為。

致大平也 五山版大作太。

○孟子曰以力至此之謂也

△章指▽文德以懷之 五山版懷作來。

○孟子曰仁則榮至此之謂也

譬若惡濕而居埤下 五山版埤作理。

近水泉之地也 五山版地下有者字。

詩邠國鷓鴣之篇 五山版無之字。

詩大雅文王之篇 五山版無之字。

大甲曰 五山版大作太、注文倣之。

○孟子曰尊賢使能至未之有也

周礼大宰 五山版大作太。

文王治岐闕譏 五山版岐作政。

不耕者出屋粟 五山版出作有。

○孟子曰人皆至不足以事父母

可引用之 五山版之作也。

○孟子曰矢人至反求諸己而已矣

△章指▽勿為矢人也 五山版無人字。

○孟子曰子路至與人為善

○孟子曰伯夷至君子不由也

望望代之慙愧之貌也 五山版代作去。

袒裼裸裎於我 五山版裼作裼。

輕忽時人禽獸畜之 五山版畜作裔。

故曰君子不由也 五山版由作中。

孟子乃平之 五山版平作評

△章指▽純聖能終 五山版終作然。

孟子卷第三 五山版作音注孟子卷之三

孟子卷第四 趙氏注

公孫丑章句下 五山版無趙氏注三字。公孫丑章句下下低八格有

凡十四章四字。

○孟子曰天時至戰必勝矣

○孟子將朝王至不為管仲者乎

權辭以對如此 五山版辭作礼。

具以語景子 五山版具作且。

景丑責孟子不敬何義也 五山版丑作日。何作同。

礼父召無諾而不至也 五山版無無諾二字。

桓公能師臣而管仲 五山版能作皆。

今天下人君土地相類 五山版土作王。

○陳臻問曰至可以貨取乎

必以贖辭曰餽贖 五山版餽作饋。

○孟子之平陸至寡人之罪也

戎昭果毅 五山版戎作以、昭作招。

○孟子謂蚺鼃曰至有餘裕哉

士師治獄官也 五山版士作土。

其欲近王似諫正刑罰之 五山版似作以。

為蚺鼃諫使之諫而去 五山版諫作謀。

孟子言人去 五山版人下有臣居官不得守其職諫正君不見納

者皆當致仕而二十字。

○孟子為卿於齊至予何言哉

○孟子自齊至天下俟其親

孟子事於齊 五山版事作仕。

謂一世之厚 五山版厚作後。

○沈同以其私至何為勸之哉

彼不復孰可 五山版復下有問字。

○燕人畔至從為之辭

今竟不能有燕 五山版今作令。

陳賈齊大夫也 五山版大夫作夫夫。

○孟子致為臣而歸至自此賤丈夫始矣

還使寡人得相見否 五山版還作遂。

孟子对王言不敢 五山版王作曰。

左右占望見 五山版占作皆。

○孟子去齊至長者絕子乎

△章指▽道之所以乖也 五山版乖作垂。

○孟子去齊至士誠小人也

濡滯猶稽也 五山版猶作孰。

怪其猶久 五山版猶作孰。

恚怒其君而去 五山版怒作恚。

論曰 五山版論作論語。

○孟子去齊至吾何為不予哉

△章指▽天非人不因 五山版因作回。

知命者 五山版無者字。

○孟子去齊至非我志也

末卷 五山版作音注孟子卷之四

孟子卷第五 趙氏注

滕文公章句上 五山版無趙氏注三字。

○滕文公章句上

○滕文公為世子至厥疾不瘳

天下之道一言而已 五山版天上有夫字。

与景公言曰尊貴者 五山版無曰字。

德惠乃洽也 五山版洽作治。

○滕定公薨至弔者大悅

大故謂大喪 五山版喪下有也字。

齋疏之服 五山版齋作齊、注文傲之。

喪上哀 五山版上作尚。

○滕文公問為國至則在君与子矣

至使老小轉尸溝壑 五山版尸作乎。

子孫必有土之義 五山版土作士。

大平時 五山版大作太。

猶殷人助者為有公田耳 五山版助作財。

彝倫攸叙 五山版叙作序。

必先正其經界 五山版無必字。

上田故謂之圭田 五山版上作土。

余夫者一家一人受田 五山版人作○。

周礼太宰曰 五山版太作大。

○有為神農之言者至惡能治國家

舍之宅也 五山版之作文。

許子冠乎 五山版冠作寇、下做此。

有小民之事 五山版民作人。

以羸路之困也 五山版作以羸困之路也。

八年之中三過其家門而不得入 五山版無得字。

司徒主人教以人事 五山版主作得。

放勳日勞之來之 五山版日作曰、但音注謂日（陰刻）音駟或作

日誤朱本又作曰。

重喻陳相 五山版陳作車。

北方之學者未聞或之先也 五山版聞作能。

許子託於大古 五山版大作太。

不相偽誕 五山版誕作詐。

特許子教人偽者耳 五山版特作時。

△章指▽不理万情 五山版万作物。

○墨者夷之至命之矣

徐子以告孟子曰 五山版重孟子二字。

嘽攢共食之也 五山版攢作相。

孟子卷第五 五山版作音注孟子卷之五。

孟子卷第六 趙氏注

滕文公章句下 五山版無趙氏注三字

○陳代曰至直人者也

請孟子 五山版請作見。

無棺槨 五山版槨作椁。

終日不獲一為之詭遇 五山版為作謂。

尚知羞恥此射者 五山版羞恥作恥羞。

○景春曰至此之謂大丈夫

一怒則構諸侯 五山版無一字。

使疆陵弱 五山版疆作強。

△章指▽阿意用謀 五山版用作相。

○周霄問曰至鑽穴隙之類也

夫人親織蠶繅之事 五山版織作執。

不知其急若此若此 五山版不重若此二字。

○彭更問曰至食功也

周礼攻木之工七 五山版七作也。

○万章問曰至雖大何畏焉

北夷怨曰奚為後 五山版夷作狄。

大誓曰 五山版大作太、注文故不与古大誓同。皆古大誓也。二大

字同余皆作太。

故孟子為陳殷湯周武之事 五山版無孟字。

△章指▽夏商之未民 五山版未作末。

○孟子謂戴不勝曰至独如宋王何

楚衆人咻之咻之者囁也 五山版囁作謹。

○公孫丑問曰至可知已矣

有好善之心 五山版善作義。

豚非大牲 五山版牲作性。

由是觀君子子路之言 五山版君作曾。

△章指▽赧然不接傷若夏畦也 五山版赧上有○。

○戴盈之曰至何待來年

孟子欲使君去闕市征稅 五山版君作者。

○公都子曰至聖人之徒也

流行於地而去也 五山版也作之。

故作邪偽之說 五山版邪作詐。

言文王大顯明王道 五山版王作士。

謂時人見彈貶者 五山版彈作憚。

揚朱墨翟之言 五山版揚作楊、以下倣之。

聖人之道不興 五山版人作王。

無尊異君父之義 五山版異作卑。

○匡章曰至而後充其操者也

是以絕糧 五山版糧作糗。

日織履妻 五山版自作目。

異日母食以馘 五山版馘作鵝。

孟子卷第六 五山版作音注孟子卷之六。

孟子卷第七

趙氏注

離婁章句上 五山版無趙氏注三字、離婁章句上下低七格有凡二

十八章五字。

○離婁章句上

離婁者 五山版者作乃。

秋毫之末 五山版毫作豪、末作未。

乃成方員 五山版員作圓。

○孟子曰離婁至吾君不能謂之賊

罹於密網也 五山版網作罔。

詩曰天之方斲 五山版曰作云。

△章指▽國由先王禮義 五山版國作因。

○孟子曰規矩至此之謂也

在夏后之世耳 五山版后作治。

以前代善惡為明鏡也 五山版代作伐。

○孟子曰三代至惡醉而強酒

疆酒 五山版疆作強。

△章指▽莫若為人 五山版人作仁。

○孟子曰愛人至自求多福

已仁獨未至邪 五山版獨作猶、此章獨字皆倣此。

○孟子曰人有恒言至家之本在身

○孟子曰為政至溢乎四海

沛然大治 五山版治作治。

○孟子曰天下至逝不以濯

故百年乃治 五山版治作治。

詩大雅文王之篇 五山版無之字。

執裸暢之禮 五山版暢作鬯。

○孟子曰不仁者至此之謂也

必自毀然後人毀之國必自伐然後人伐之 五山版二然字共作而。

大甲曰 五山版大作太。

△章指▽戰戰恐慄也 五山版慄作栗。

○孟子曰桀紂至此之謂也

刺時君臣何能為善乎 五山版刺時作朝財。

○孟子曰自暴者至而不由哀哉

○孟子曰道在邇而求諸遠

謂不親其親不事其長 五山版下不作所。

△章指▽邇而易也 五山版邇作爾。

○孟子曰居下位至未有能動者也

○孟子曰伯夷至必為政於天下矣

大公辟紂 五山版大作太。

其餘皆天下之子耳 五山版耳作有。

○孟子曰求也至任土地者次之

況於爭地 五山版於下有爭城二字。

△章指▽同聞鳴鼓 五山版同作固。

○孟子曰存乎人者至人焉慶哉

△章指▽目可神候 五山版可作為。

○孟子曰恭者至笑貌為哉

△章指▽何由干之 五山版干作王。

○淳于髡至援天下乎

問禮 五山版問作尚。

○公孫丑曰至不祥莫大焉

○孟子曰事執至曾子者可也

吾未之聞也 五山版吾作善。

失仁義則 五山版失作夫、仁作不。

○孟子曰人不足至而國定矣

政不足問也 五山版足下有与字。

詩云室人交徧謫我 五山版室作適。

不足復非說 五山版說作說。

○孟子曰有不虞之譽

○孟子曰人之易其言也

○孟子曰人之患在好為人師

○樂正子至克有罪

△章指▽尊重道 五山版尊下有師字。

人之大綱 五山版大作太。

○孟子謂樂正子曰

○孟子曰不孝至以為猶告也

○孟子曰仁之實至手之舞之

豈從自覺 五山版從作能。

△章指▽不能自知 五山版不作而。

○孟子曰天下至此之謂大孝

底予瞽瞍底予而天下化瞽瞍底予 五山版底字皆作底、注文倣之。

孟子卷第七 五山版作音注孟子卷之七

孟子卷第八 趙氏注

離婁章句下 五山版無趙氏注三字、離婁章句下下底五格有凡三

十三章五字。

○孟子曰舜生至其揆一也

書曰大子發上 五山版大作太。

千有余里以外也 五山版里下有千里二字。

○子產聽鄭國之政至亦不足矣

惠民之用 五山版用作心。

可以成步渡之功 五山版步作涉。

○孟子告齊宣王曰至何服之有

△章指▽諷諭 五山版諷作風。

○孟子曰無罪而殺士

仁鳥曾逝 五山版曾作增。

○孟子曰君仁莫不仁

○孟子曰非禮之禮

○孟子曰中也至不能以寸

○孟子曰人有不為也

○孟子曰言人之不善

○孟子曰仲尼不為已甚者

△章指▽論曰 五山版論作語。

○孟子曰大人者言不必信

○孟子曰大人者不失

○孟子曰養生者不足以當大事

○孟子曰君子至欲其自得之也

君子欲目得之也 五山版目作自。

○孟子曰博學而詳說之

○孟子曰以善服人者

○孟子曰言無實不祥

○徐子曰至君子恥之

至於四海者有原本也 五山版於作放。

○孟子曰人之至非行仁義也

衆民去義君子存義也 五山版民作氏。

○孟子曰禹惡至坐以待旦

書曰禹拜讜言五山版讜作昌。

△章指▽大平之隆 大作太。

○孟子曰王者至竊取之矣

大平道 五山版大作太。

五山版自此章至孟子曰天下之言性也章欠章指。

○孟子曰君子之沢五世而斬

○孟子曰可以取

但傷此名亦不陷於惡也 五山版名上有三字、亦不陷於惡也

六字作列士病惡也。

○逢蒙學射至發乘矢而後反

孟子曰是亦羿有罪焉 五山版無是字。

用心不邪僻 五山版僻作辟。

庾公之斯至曰夫子何為 五山版無曰字。

○孟子曰西子至以祀上帝

○孟子曰天下至可坐而致也

不順物 五山版物下有之性而改道以養之八字。

空虛 五山版作虛空。

○公行子至不亦異乎

○孟子曰君子至君子不患矣

何為以此事來加我 五山版事作士。

不致意 五山版意作患。

○禹稷當平世至雖閉戶可也

由己溺之 五山版之下有也字。

○公都子曰至是則章子已矣

○曾子居武城至易地則皆然

牆屋之壞 五山版壞作壞。

△章指▽謂得其同 五山版同作宜。

○儲子曰至與人同耳

○齊人有一妻至幾希矣

喜悅之貌 五山版貌下有也字。

孟子卷第八 五山版作古注孟子卷之八。

孟子卷第九

趙氏注

萬章章句上 五山版無趙氏注三字、萬章章句上下底十一格有凡

九章三字。

○萬章章句上

○萬章問曰至予於大舜見之矣

父母見惡之厄而思慕也 五山版無也字。

憂陰氣也 五山版陰氣作氣陰。

△章指▽夫孝者 五山版無者字。

○萬章問曰至喜之奚偽焉

齊風南山之篇 五山版齊下有國字。

父母亢答 五山版亢作先。

帝堯知舜大孝 五山版堯作亦。

取其善者 五山版其作於。

象見舜生在牀 五山版無生字。

○萬章問曰至此之謂也

象不得施教於其國 五山版施作放。

納貢賦与之比諸見放也 五山版比作此。

○咸丘蒙問曰至不得而子也

故問齊野人之言 五山版問作聞。

如喪考妣思之 五山版考作者。

人情不遠以己之意 五山版遠作違。

章三字。

齋慄 五山版慄作栗、注文倣之。

○孟子曰伯夷至非爾力也

書尚書逸篇 五山版無此五字。

更思廉絜 五山版絜作潔。

○万章曰堯以至此之謂也

予天民之先覺者 五山版予作子、者下有也字。

天之曆數 五山版曆作歷。

阨窮而不閔 五山版閔作憫。

大誓曰 五山版大作太、注文倣之。

舍五德 五山版作合三德。

○万章問曰人有言至其義一也

△章指▽由可踰 五山版由作猶。

大甲能改過 五山版大作太、大甲大字以下倣之。

○北宮錡問曰至以是為差

大丁 五山版大作太、大丁大字以下倣之。

增惡其法度 五山版增作憎。

△章指▽義於仁 五山版義作篤志。

無其職是則 五山版無下又有無字。

○万章問曰人有言至朕載自毫

王制則合也 五山版則作期。

歸於身絜不汚己而已 五山版汚作亏。

侯一位子男同 五山版位下有伯一位三字。

○万章問曰或謂至何以為孔子

十分之一也上士之祿 五山版也下有大夫祿居於卿祿四分之

△章指▽君子大居正 五山版大作夫。

一也十二字。

○万章問曰或曰至賢者為之乎

居卿祿三分之一也 五山版無一字。

孟子卷第九 五山版作音注孟子卷之九。

○万章問曰至其義一也

五人屈礼而就也 五山版就下有之字。

孟子卷第十 趙氏注

非王公尊賢也 五山版公下有之字。

万章章句下 五山版無趙氏注三字、万章章句下下底五格有凡九

○万章曰敢問公養之仕也

今尊者賜己 五山版已作之。

其交以道其餽也 五山版交下有也字。

以礼道来接己 五山版来下有交字。

孟子曰孔子所仕者欲事行其道 五山版事作仕。

孔子欲仕道 五山版仕作事。

難常有乏絕則 五山版乏作之。

○孟子曰仕至而道不行恥也

辭尊貧者 五山版貧作富。

○万章曰士之至尊賢者也

△章指▽不弘也 五山版無也字。

○万章曰敢問至其官召之也

若子思之意亦 五山版若作君。

取非招不往也 五山版招上有其字。

旌注旄首者 五山版注作旌。

周道如底 五山版底作底、注文倣之。

有当職之事 五山版当作官。

○孟子謂万章曰至是尚友也

△章指▽無友 五山版無作好。

○齊宣王問卿至不聽則去

王曰卿不同乎 五山版同作問。

異姓之卿如之何 五山版何下有也字。

三而待放遂不聽之 五山版三作立、遂作逐。

孟子卷第十 五山版作音注孟子卷之十。

孟子卷第十一 趙氏注

告子章句上 五山版無趙氏注三字、次行底十五格有凡二十章四字。

字。

○告子章句上

○告子曰至必子之言夫

一曰杞木名也 五山版名作各。

△章指▽順夫自然 五山版夫作天。

○告子曰至其性亦猶是也

△章指▽激躍 五山版躍作濯。

○告子曰至人之性与

孟子言犬之性 五山版犬作大。

△章指▽是在其中 五山版是作人。

○告子曰至者炙亦有外与

情往敬之 五山版往作性。

○孟季子問至飲食亦在外也

○公都子曰至好是懿德

常好美德 五山版美作善。

○孟子曰富歲至悅我口

人之子弟也 五山版也作言。

詩云詒我來麇 五山版詒作貽。

言目之同耳 五山版耳作也。

於心獨無所同然乎 五山版於上有至字。

△章指▽進之 五山版進作集。

○孟子曰牛山至惟心之謂與

可以為美乎 五山版無以字。

△章指▽不干猶止 五山版干作平、止作正。

○孟子曰無或至非然也

一日暴溫之 五山版日作目。

曰弈秋 五山版秋作利。

△章指▽十人惡之 五山版十作一。

○孟子曰魚我至失其本心

○孟子曰至求其放心而已矣

可哀憫哉 五山版憫作閱。

○孟子曰今有至不知類也

猶欲信之 五山版猶作由。

○孟子曰拱把之桐梓

○孟子曰人之至尺寸之膚哉

体有貴賤有大小 五山版大小作小大。

害貴小口腹也 五山版口作曰。

○公都子問曰至大人而已矣

利欲之事 五山版事作士。

○孟子曰有天爵者至必亡而已矣

○孟子曰欲貴者至人之文繡也

凡人之所貴富 五山版富下有貴字。

人所自有者 五山版人下有之字。

○孟子曰仁之勝不仁也

何能勝 五山版無能字。

亡猶無也 五山版猶作由。

○孟子曰五穀者種之美者也

夫仁亦在乎 五山版仁作人。

○孟子曰羿之至亦必以規矩

彀張也弩向包的者 五山版無也字包字。

孟子卷第十一 五山版作音注孟子卷之十一。

孟子卷第十二

告子章句下

趙氏注

五山版無趙氏注三字。告子章句下下底六格有凡一十六章五字。

○任人有問至則將摟之乎

高於山耶 五山版耶作邪。

金重於羽耶 五山版羽下有謂多退同而金重耳一帶鈞之金豈

重一車羽十八字、耶作邪。

△章指▽偏殊 五山版偏作偏。

○曹交問曰至有余師

為有力人矣則 五山版矣下有然字。

拳百鈞百鈞三千斤也 五山版不重百鈞二字。

堯言行義之言 五山版行作仁。

△章指▽一言以蔽之 五山版之作也。

○公孫丑問曰至五十而慕

無佗疏之也 五山版佗作他、下倣之。

何辜於天 五山版於作于。

詩邶風 五山版邶作耶。

○宋棼將之楚至何必曰利

三軍之士悅 五山版士作上。

○孟子居鄒至得之平陸

致幣帛之禮 五山版無帛字。

但遊交禮 五山版遊作遙。

△章指▽或不答以其宜也 五山版不作否、答作各。

○淳于髡曰至衆人固不識也

見貢於桀 五山版貢作責、復貢之貢字倣此。

進退行止未必同也 五山版止作正。

皆師傅之臣 五山版傳作佗。

故曰処於淇 五山版無於字、淇下有水字。

出適佗國 五山版佗作他。

△章指▽見機 五山版機作幾。

○孟子曰五霸至諸侯之罪人也

敬老愛少 五山版少作小。

○魯欲使慎子至志於仁而已

△章指▽既其用兵 五山版既作賤。

○孟子曰今之至不能一朝居也

○白圭曰至大桀小桀也

使二十而稅一 五山版使作吏。

万室之邑 五山版邑作国。

△章指▽裔土簡惰 五山版土作王。

○白圭曰吾子過矣

○孟子曰君子不亮惡乎執

○魯欲使樂正子至国欲治可得乎

有智慮乎 五山版智作知。

佗人之言 五山版佗作他。

△章指▽漉漉 五山版漉字作灑。

○陳子曰至免死而已矣

窮餓而去不疑也 五山版餓作饑。

故不言去 五山版去作天。

△章指▽備此 五山版備作漏。

○孟子曰舜堯至死於安樂也

管夷吾 五山版夷吾作仲。

囚執於士官 五山版囚作困。

隱於都市而以為相也 五山版市下有穆公拳之於市六字。

入謂国内也 五山版入作人。

驕慢荒忽 五山版忽作怠。

○孟子曰教亦多術矣

孟子卷第十二 五山版作音注孟子卷之十二。

孟子卷第十三 趙氏注

尽心章句上 五山版無趙氏注三字、尽心章句上下底七格有凡四

十六章五字。

○尽心章句上

為精氣主 五山版主作生。

北辰居其所 五山版北作比。

拱之 五山版拱作共。

○孟子曰尽其至所以立命也

○孟子曰莫非至非正命也

○孟子曰求則至求在外者也

○孟子曰万物至求仁莫近焉

此最為近 五山版近作樂。

○孟子曰行之而不著焉

△章指▽以為道 五山版無以字。

○孟子曰人不至無恥矣

○孟子曰恥之至何若人有

○孟子曰古之至得而臣之乎

不有所樂有所忘也 五山版忘作志。

若伯夷非其君 五山版若作君。

隱各有方 五山版万作方。

○孟子曰謂宋句踐至兼善天下

○孟子曰待文王而後興者

△章指▽君子特立 五山版特作時。

○孟子曰附之以韓魏之家

△章指▽卓絕乎凡也 五山版凡作此。

○孟子曰以佚道至不怨殺者

佚道 五山版佚作迭。

○孟子曰霸者至豈曰小補之哉

○孟子曰仁言至善教得民心

○孟子曰人之至達之天下也

知敬凡 五山版凡作兄。

○孟子曰舜之至莫之能禦也

○孟子曰無為其所不為

○孟子曰人之至深故達

德慧術知 五山版知作智。

○孟子曰有事至而物正者也

△章指▽社稷 五山版社作礼。

此四科 五山版科作利。

○孟子曰君子至不与存焉

△章指▽賢人能之 五山版能作前。

○孟子曰庠土至不言而喻

而知之也 五山版無之字。

○孟子曰伯夷至此之謂也

導其妻子使養其老 五山版養其作其養。

△章指▽使不凍餒 五山版無凍字。

○孟子曰易其至有不仁者乎

○孟子曰孔子至不成章不達

科飲也 五山版科作利。

○孟子曰鷄鳴而起

○孟子曰楊子至而靡百也

○孟子曰飢者至不為憂矣

○孟子曰柳下惠

○孟子曰有為者

△章指▽論之一簣 五山版之作語。

○孟子曰堯舜至其非有也

五霸若能 五山版若作方。

○公孫丑曰至則篡也

大臣 五山版大作人。

△章指▽志異 五山版志作忠。

○公孫丑曰至孰大於是

保其尊榮 五山版保作祿。

△章指▽素餐之謂也 五山版無也字。

○王子墊問曰至大人之事備矣

齊王子名墊也 五山版王作士。

志之所尚 五山版無之字。

○孟子曰仲子至奚可哉

△章指▽有大小 五山版大小作小大。

○桃応問曰至樂而忘天下

○孟子自范之齊

謂諸弟子 五山版無諸字。

喟然而嘆曰 五山版嘆作歎。

豈非是人之子也 五山版豈作皆

○孟子曰王子至居相似也

○孟子曰食而弗愛豕交之也

△章指▽言敬愛也 五山版言作謂。

○孟子曰形色天性也

○齊宣王至弗為者也

○孟子曰君子至所以教也

△章指▽教人之術 五山版人作之。

養育英才 五山版才作未。

聖所不倦 五山版所作人。

○公孫丑曰至能者從之

大高遠 五山版大作太。

○孟子曰天下有道

○公都子曰至滕更有二焉

夫子不答何也 五山版何作可。

△章指▽貴乎 五山版乎作平。

○孟子曰於不可而已者

○孟子曰君子至仁民而愛物

先視其親戚 五山版視作親。

○孟子曰知者至謂不知務

孟子卷第十三 五山版作音注孟子卷之十三。

孟子卷第十四 趙氏注

尽心章句下 五山版無趙氏注三字、尽心章句下下低七格有凡三

十八章五字。

○孟子曰不仁至及其所愛也

王政不偏 五山版偏作徧。

有災傷加所愛之臣民 五山版無加字。

孟子曰惠王貪利 五山版王作三。

△章指▽著此魏王 五山版無此字。

○孟子曰春秋無義戰

毫毛 五山版毫作豪。

織芥 五山版芥作介。

不得其正者也 五山版正作王。

○孟子曰尽信書則不如無書

梓材曰欲至 五山版材作林。

誅討 五山版討作紂。

△章指▽嵩高 五山版嵩作崧。

○孟子曰有人至焉用戰

虎賁綴衣趣馬 五山版綴作贅、趣作取。

安正爾也 五山版正作止。

犀至地稽首 五山版作額角犀厥地稽首。

○孟子曰梓匠輪輿

△章指▽惟度 五山版惟作準。

○孟子曰舜之飯糗茹草也

○孟子曰吾今而後知殺人親之重也

○孟子曰古之為閔也將以禦暴

譏閉非常也 五山版非作我。

○孟子曰身不行道不行於妻子

○孟子曰周于利者凶年不能殺

○孟子曰好名之人能讓千乘之國

○孟子曰不信仁賢則國空虛

○孟子曰不仁而得國者

○孟子曰民為至則變置社稷

諸侯封以為大夫 五山版封作能。

○孟子曰聖人至況於親炙之者乎

柳下惠之厚 五山版厚作和。

踰聞尚然況親見熏炙者也 五山版踰作諭。

△章指▽柳下 五山版下有惠字。

○孟子曰仁也者人也

○孟子曰孔子之去魯曰遲遲吾行也

說已見上篇 五山版作注義見万章下首章。

○孟子曰君子之厄於陳蔡之間

君子之道 五山版作君子道者。

○貉稽曰至文王也

○孟子曰賢者以其昭昭使人昭昭

○孟子謂高子曰山徑之蹊

○高子曰至兩馬之力与

○齊饑陳臻曰至為士者笑之

人欲復使我 五山版人作今。

○孟子曰口之至不謂命也

四枝四枝解倦 五山版二枝字共作肢。

此皆人性之所欲也 五山版此作比。

好礼敬 五山版礼下有者得以礼四字。

○浩生不害問曰至四之下也

不可知之 五山版之下又有之字。

己之所欲乃 五山版所作可。

不意不信也 五山版意作億。

○孟子曰逃墨至又從而招之

○孟子曰有布至而父子離

布軍卒 五山版卒作率。

○孟子曰諸侯之宝三

諸侯正其封疆 五山版正作王。

和民之璧 五山版民作氏。

○盆成括至殺其軀而已矣

未達而去後仕於齊 五山版仕作自。

○孟子之滕至斯受之而已矣

夫子之設科也 五山版予作子。

○孟子曰人皆至穿踰之類也

義不可勝用 五山版用下有也字。

○孟子曰言近至自任者輕

大重自任大輕 五山版自作目、下大作太。

○孟子曰堯舜至俟命而已矣

堯舜之体性自善 五山版自作目。

行其節邪 五山版節下有操自不回四字。

○孟子曰說大人至吾何畏彼哉

大人謂 五山版無謂字。

方一丈 五山版無一字。

侍妾衆多 五山版侍作待。

○孟子曰養心至雖有存焉者寡矣

○曾皙嗜羊棗至名所獨也

△章指▽情礼 五山版礼作理。

○万章問曰至斯無邪慝矣

故思之 五山版之下有也字。

論語曰師也僻 五山版僻作辟。

△章指▽率而正 五山版而作以。

○孟子曰由堯至則亦無有乎爾

有勇謀 五山版勇謀作謀勇。

△章指▽一契之趣也 五山版趣作起、無也字。

孟子卷第十四 五山版作音注孟子卷之十四。

孟子篇叙

五山版不附。

旧鈔本趙注孟子校記(一)訂正補補

三〇七頁下五行 戒↓戎

六行 戒(三字)↓戎

三一六頁上二行 本重↓本竜谷本重

三二二頁上二行 本邪↓本竜谷本邪

旧鈔本趙注孟子校記(二)訂正補

一七一頁上六行 要之校三↓三要之校

一七四頁上一九行 孟子卷第四↓卷末

二〇〇頁上四行 不倦。↓不倦。

一八行 州·何↓州。何

古活字版趙注孟子校記訂正

一七一頁上一二行 戈。孔↓戈。開延 各本延作筵。孔

一七六頁上二行 間↓聞。

一行 室↓至。

下二行 字。↓字。先人之之所受也 各本不重之字。

一七八頁上一六行 譬如↓譬

一八〇頁上一五・一六行間 必以驢辭曰餽驢 各本餽作饋。

一八二頁上二行 孟子卷第四卷末

下六行 惡・喪↓惡 喪

一八三頁上一七行 者惡↓者至惡

一八六頁上二行 曰可↓曰至可

八行 時↓待

下二行 襄。↓襄。時人見彈貶者 各本彈作憚。

一八七頁上六行 向↓句

下一〇行 猶。↓猶。此章独字皆倣此。

一八九頁上一三行 名↓各

一九二頁下九行 已↓己

一九三頁上六行 同各↓同 各

一九四頁下七行 太。↓太。注文倣之

一九五頁下一行 日↓曰

一五行 力↓力也

一九六頁上一四行 俟。聞↓俟。增惡其法度 各本增作憎。

聞

一九七頁下一五行・一六行間 取非招不往也 各本招上有

其字。

一九九頁下一五行・一六行間 於心独無所同然乎 各本於

上有至字。

二〇六頁上三行 曰孰↓曰至孰

二〇七頁下九行 惟度↓∧章指∨惟度

古活字版趙注孟子校記補遺

(一) 現存本略解

(2) A種 b

○秋田県立秋田図書館藏 五冊(三〇・四七)

①栗皮表紙二七・七×二〇・〇。各冊に根本通明自筆にて

「古完本趙注孟子」と朱書。⑨(書入)墨筆の返り点・送りが

な・縦点・附訓あり江戸期のもの。また朱墨の根本通明書き入

れもあり。(印記)「根本/氏藏」「根本/子龍/圖書」

(按)根本通明については(三)存目 (3) A種 cを参照。